昭和46年 9 月 5 日発行通巻26号（毎日曜日発行）　昭和46年 2 月 5 日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

9/5
220円
26

AE 朝日=ラルース

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説（２），哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第26号

カラーページ

表紙　アメリカミンク　Ph. J. Burton-Photo Researchers
表３　**ギャラリー**　土製の熊　水尾比呂志

監修　犬飼哲夫（北海道大学名誉教授）
翻訳　西出不二雄

私たちの仲間

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

9月1日発売



世界動物百科
27号　9／12

カラーページ

食肉目　裂脚亜目
□アナグマ科
オオパンダ属　オオパンダ
ショウパンダ属　ショウパンダ
キンカジュー属　キンカジュー
ハナグマ属
アライグマ属　アライグマ

《珍獣のなかの珍獣》といわれるオオパンダの登場です。ぬいぐるみ人形と見まがう白と黒の色分け模様，クマのようなおどけた態度。中国の文化大革命に参加した（？）栄光のパンダ「反修」君も，ペイチン（北京）から連帯のあいさつをしていますよ。

私たちの仲間

特集・雪男の正体を探る　編集部
ナゾを解く３つの手がかり
決め手になるシブトンの「足跡」
ジャワから来たオランウータン　上野益三
〈動物〉日本渡来記　1（新連載）
エゾヒグマの生態　犬飼哲夫
カラーページ解説
傷だらけの栄光　畑　正憲
ヒグマと２人のイノシシ　25
双生児ザルの誕生
読者のアルバム　2

私たちの仲間
26号……9月5日

中国動物散歩　　藤堂明保

「革命」は動物の生き方を変えた



延安の大通りをいくラバの群れ　撮影　筆者

大通りをいく馬車

ペイチン（北京）のチャンアンタアチェ（長安大街）は，10車線もある大通りである。「人行横道」（レンシンホンタオ）という札が立っている所が，横断歩道である。しかし，向こう側にいきつくには，まん中の「安全島」（アンチュアンタオ：島でなく安全地帯のこと）でひと息いれ，もう一方を見渡して車の有無を見定めてから，渡らなければならない。一気に渡りきるには，少し道幅が広すぎるのである。その大通りが朝夕の通勤時間には，自転車の大行進で埋まってしまう。今は自転車が北京人の「自家用車」なのだ。4列5列に並んで，いつ果てるとも知れぬ大行列が延々と続く。壮観ということばがぴったりである。

その大通りのいちばん端を，水瓜やキャベツを満載した3頭立ての馬車が，足を早めて歩いていく。大通りの中央に近い車線2本が自動車，次の2車線が自転車，いちばん端が馬車というように（別に通行区分線があるわけではないが）おのずと3種の車によって利用帯が分かれているのである。界線を引くようなヤボなまねをせずに，自然と領分が分かれているところが，すこぶる中国的でおもしろい。

強情なロバ

3頭引きの先頭を小またで歩くのは，かわいいロバである。これはペット兼ガイドの役であって，車の牽引には，たいして貢献していない。もっとも，ロバの先導役としての働きには，わたしは今でも不信の念を抱いている。

それは，かれこれ30数年もむかし，わたしが外務省の研究生として，ペイチンに留学していたころのこと。秋のはじめ，ふと思いついて，ペイチンの西郊60キロにあるパーターリン（八達嶺）のあたりに残る万里の長城を見にいったときのことだ。

今でこそ，りっぱな自動車道が峠の頂まで通っており，そこには休憩所も，こぎれいな接待所もあるのだが，当時はなにひとつない岩山の急坂を，あえぎあえぎ登るのだった。タートン（大同）へいく汽車に乗ってパーターリンの駅でおり，近くの山村でロバを借りた。同行3人，わたしが先頭に立って登り始めた。

ものの500メートルもいったころ，山あいに農家があって，その庭先に雌のロバがつないであった。それを見つけたとたん，わたしの乗ったロバはすたすたとそちらへ駆け始め，手綱を引いても止まらないで，一気に小さな門をくぐり抜けたからたまらない。あっというまに，わたしは額を門のかまちにしたたか打ちつけて，どんと落馬した。目から火花が飛んで，大きなコブができてしまった。ロバはかわいいようで，実はいたって強情なしたたか者なのである。

働き者のラバ

これにくらべると，ラバはほんとに賢い働き者である。しっかりとくびきをかけて，わきめもふらず前進しているけなげな労働者は，2頭のラバである。ウマよりもひとまわり小さいが粗食に耐えて，「ユイ！」といえば止まり，「ツォウ！」といえば歩く。休んでいるときはやさしい伏し目で，じっと5メートル先の地面を見ている。

華北の中国人は，これらの家畜を「牲口」（ションコウ）といってたいせつにする。5人家族なら「五口」といい，人間なら「人口」といって数えるのだから，「牲口」もまた一人まえに糧を ↙

↘ 食う口数の仲間なのだ。だから，かつて日本人が東北から華中を侵略したころ，軍馬の不足を補うために，手当たりしだいに「牲口」を徴発して連れ去ったとき，華北の農民は涙を流して，心なき東洋鬼子のしうちを恨んだのだった。まさに日本人は，餓鬼として目に映ったことだろう。

いまや人民公社では，丸出しのエンジンがポコポコと音をたてて動いている拖拉機（牽引車）が，かなり活躍しはじめた。どの公社にも，たいていその修理工場があって，組立てや修理をしている。馬車ならせいぜい500キロしか運べないが，この文明の利器は，一見おそまつながら1トン半の荷を牽引できる。集団で野良へ出る人たち10数人を，農具とともに運ぶこともする。こうして馬車は，しだいにトーラーチーによって，その働き場を失いつつあるようだ。

同行した立教大学のNさんが，感にたえぬようにいった。

「ラバの引く馬車を見ただけでも，わたしは中国にきたかいがありましたよ。中国史を研究していながら，馬車も農村も知らないようではね。それに，馬車で畑に出るという，この広大なひろがりを知らんようではね」

イヌとアヒル

むかしの中国の農村には必ず獰猛なイヌがいて，よそ者とみれば，村はずれに戦列を敷いて吠えたものだ。それにアヒルというやつがまた警戒心がおう盛で，村の者が通ってもそしらぬ顔をしているくせに，よそ者とみれば30～40羽がいっせいに首をもたげて，ゲエゲエとがなりたてる。とりわけ地主の家のイヌとなると，むくつけき姿をしてふんぞりかえり，それが小作人をおどしたり，貧乏人の子どもに無言の圧力を加えたりしたものである。

ところが，近ごろの中国にはイヌがいない。農村はもちろんのこと，町かどにも住宅地にも，さっぱりイヌの影を見かけない。ペイチンの朝は，小鳥の声とニワトリの声とで明け始めるけれども，ついぞイヌの遠吠えなどは聞かなかった。

用のない番人

一方，わたしたちが見にいったペイチン南方のホワントゥーカン（黄土崗）人民公社でも，さらに南に離れたペイチン市チョンウェン（崇文）区の五・七幹部学校でも，アヒルは数千羽も飼っていた。五・七幹部学校とは，文革のさなかに知識人や党幹部たちが，みずから農作業を身につけるために開拓した農場である。そこでは食糧自給のためにアヒルを飼い，その余分を町に供出している。年間4000羽もペイチンに送りだしているそうだ。そこのアヒルはまるまると太って，みごとな育ちぶりだったが，わたしたちの姿を見てもいぶかるどころか，いそいそと群れ集まってきた。

思うに農村でも都市でも，現代中国ではよそ者の侵入を警戒してイヌを飼う必要は，まったくなくなったのだ。かといって，ペットとしてイヌを飼うのは，いかにもブルジョア趣味で気がひける。こうして何千年の間，人間のために家の番をしてきたイヌの重大な役目は，なくなってしまったわけである。

アヒルにしてもそうだ。かれらは集団農場でいろいろな人にえさをもらう。接する人間は何十人，何百人とあって，しかもときどき世話係が交代して顔ぶれがかわる。こうなると，「よそ者」というものはなくなってしまう。そこで，見なれぬ人間を見るとがなりたてる，という古い習性を忘れてしまったのに違いない。「革命」は，なんと動物の生き方にまで影響を及ぼしたのだ。

イェンアン（延安）というところは，黄土高原が侵食された深い谷間にできた小さな山の町である。その西北の端に，ナツメやリンゴの木の茂るツァオユアン（棗園）という村落がある。だいたい樹木の乏しい土地だが，ここには緑の風が吹いていて，深く掘り下げた井戸から，こんこんと水がわいている。ここにかつてマオ（毛）主席の住んでいた穴居式の家がある。その旧居から坂をおりて，果樹園の中を歩いていると，濃い緑のかげに白い老犬が1匹ねそべっていた。中国へ来てはじめてイヌを見たのである。珍しさにカメラを向けても，いっこうに吠えようともせず，身動きすらしない。

革命のあと，「私有」という考えが薄れ，互助組や農村合作社を経て「人民公社」へと進み，農村のすべてが共同でまかなわれるようになった。そして，個人の私物を番する役目は，ついになくなってしまったのである。老犬は何の夢を見ていたのだろう。用のなくなった自分をあわれんでいたのか，それとも「大同」の世を楽しんでいたのだろうか。■

（中国文学者）

筆者は，1971年6月，中国各地を訪問した。

撮影　出版写真部　　　協力　上野動物園

メナムはスイカがお好き

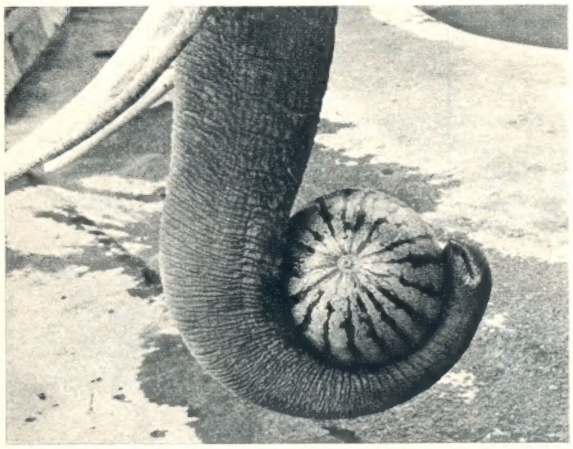
暑さも峠を越したとはいえ，ジメジメした湿気の多い陽気は，南国育ちの動物たちでさえも不快千万。冷房が無理なら，せめて内側からの涼気と栄養でもなければやりきれない。

子ゾウの「メナム」は，スイカが大好物。でも，こう物価が上がってインフレぎみになると，しょっちゅう食べるわけにはいかない。「メナム」にとっても，飼育のおじさんの悩みはよくわかるのです。

きょうは，久しぶりにスイカにありつけるというので，朝からソワソワしっぱなし。そのためか，いざ食べるとなるとからだに似合わず，ちょっぴり興奮ぎみ。しばらくぶりの大好物に，食べ方まで忘れてしまい，思案のあげく，やっと思いだしたしだいです。

人間様みたいに皮を残すなんて，とても考えられないぜいたくなこと。皮にはビタミンがたくさんあるし，食べなければ損。

あしたの朝，きっと「メナム」の膚（はだ）は，すべるように美しくなっていることでしょう。



1
もらったのは
よいけれど
サーテ
どうしよう



2
こうやれば
手ごろに割れる

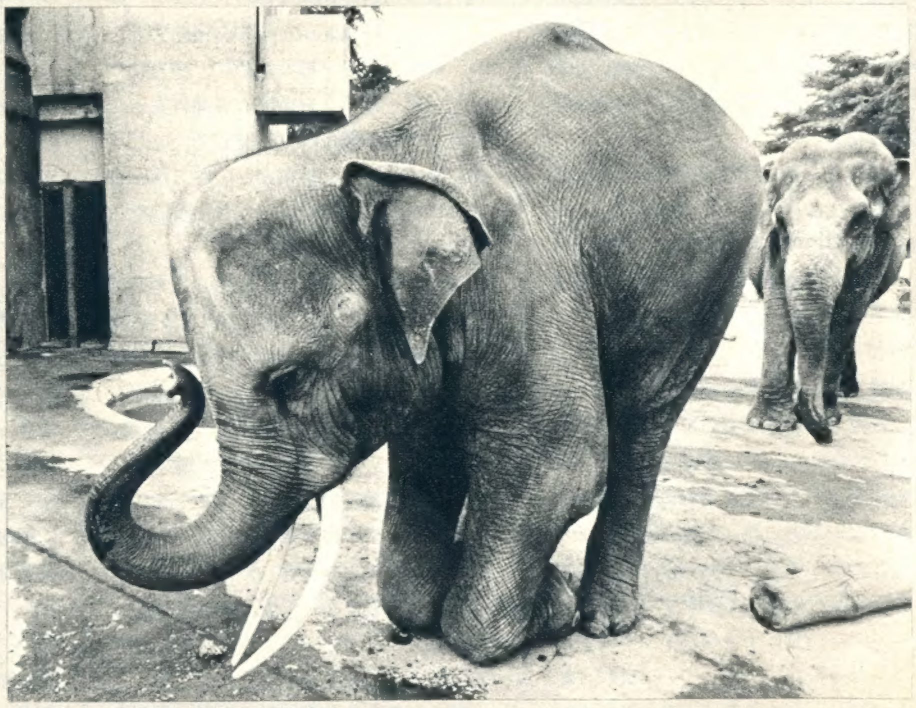


3
ヨイショ
なかなか
おいしそうな
スイカだ



4　こんなしあわせな気分は，久しぶりだなあ

5　どうも，ごちそうさま　またよろしく



夏と動物〈下〉



〝暑さ〟からの自衛

高木健太郎

イヌは，パンチングという，浅く早い呼吸によって体内の熱を放出する　撮影　本誌編集部

ヒトはあらゆる動物のなかで，もっとも発達した汗腺（かんせん）をもっているといわれる。そして「汗」による体温の調節は，日常生活を営むうえで，きわめてあたりまえのこととして，人びとのあいだに受け入れられている。

しかし他の動物，たとえばイヌは，暑いときは舌を出し，激しい息づかいによって，からだじゅうの熱を放散させなければ生きていかれないし，他の動物でも，ヒトほど合理的な体温の〝自動調整機能〟をもっているものはない。

そこで，今回はいろいろな動物が，いかにして暑さから身を守っているかを考えてみよう。

体内にたまる熱の放出

わたしたちの身体をおおっている皮膚と，それに接する皮下の組織の温度は，安静にしていても，外界の気温や気流，また，空や壁，地面などからの輻射の強さなどによって，摂氏0度近くから40度近くまで大きく変動する。しかし，からだの内部の温度は，器官や時刻によって多少の違いがあっても，ほぼ36～37度に一定している。

それは，からだに発生する熱（産熱）と外に出ていく熱（放熱）とが等しいからである。炭水化物，脂肪，たんぱく質が，より簡単な物質に分解する際に発生する化学的エネルギーの一部は，筋肉の運動や細胞内外の物質の移動に使用されるが，大部分は熱に変わってしまうのである。ヒトが1日に使用する化学的エネルギーは約2500キロカロリーで，どんなに静かにしていても，1500キロカロリーを下まわることはできない。これだけの熱は，なんらかの方法で外に出さなければ，からだの内部にたまり，それだけ体温は上がることになる。

放熱の方法には輻射・伝導・対流・蒸発の4種がある。

太陽に照らされたり，熱した鉄のそばにいくとあたたかく感ずるのは，そこから電磁波の形で熱が皮膚に加えられるためである。皮膚温よりも高い物体に近寄ると，皮膚は熱をもらい，皮膚のほうが高温であれば，皮膚から物体に熱が移動する。一般には外界の物体のほうが皮膚よりも低温だから，からだからこの輻射によって熱が逃げることになる。

伝導・対流は，からだが直接に物体または空気と触れた場合に起こる現象で，皮膚の熱伝導度と伝導面積（触れている面積），皮膚と物体または空気との温度差などによって増減する。皮膚そのものは熱に対するよい絶縁体であるが，皮膚の血流が増すと絶縁は悪くなり，熱は逃げやすく，または加わりやすくなる。空気の場合は，気流の大きさと熱の移動は比例する。扇風機が涼しいのは，対流によってからだからよけいに熱が奪われるからである。しかし，気温が35°C以上になると，かえって暑く感じる。

液体が気化するときには，気体の分子運動のエネルギーに変化するぶんだけ，液体またはそれに接する物体から熱が奪われるために，その温度が下がる。水の場合は温度によって違うけれども，1リットルの水が蒸発すると，約580キロカロリーの熱を奪うことになる。たとえば，人のからだの比熱を約0.8とし，体重を50キログラムとして，1リットルの汗が体表面から蒸発した場合には，体温を約13度下げることになるわけである。呼吸によっても，水分を失っているわけで，1日に約200キロカロリーの気化熱を，からだから奪っていることになる。

以上のうち輻射・伝導・対流は，皮温が周囲の物体や空気よりも高いときには，かなり大きな放熱効果があるが，気温が36°C以上，もしくは外の物体の温度，たとえば壁面などが50度近くになると，かえって熱がからだのほうにはいってくることになり，汗による蒸発だけが，放熱作用として役だつことになる。

汗のなかには，微量の食塩その他の無機・有機物質がふくまれているが，99パーセントは水であり，尿のような不要物質の排泄には役だたないが，その主要なはたらきとして，水分の蒸発による放熱作用がある。汗腺からは気温が30°Cを越えると汗が分泌（ぶんぴ）されるが，これより低温でも，皮膚をしみ通って1日約600グラムの水分が少しずつ蒸発している。これを一般には，不感蒸泄（ふかんじょうせつ）といっている。それにも，もちろん放熱作用があり，結局，蒸発には呼吸・汗・不感蒸泄の3つが関係する。

動物たちの耐暑術

暑さに耐えて，体温をほぼ一定にするためには，産熱をおさえて放熱を盛んにすればよい。

まず，ヒトでもイヌでも，暑いときには食事の量が減り，結果的には代謝が少なくなり，産熱が小さくなる。盛夏に動物園で動物を見ると，ほとんどダラリとして動かない。それは逆にいうと，筋肉収縮による産熱を，少しでもおさえるためである。また，冷たい床に毛の少ない腹や手足をくっつけて，伝導による放熱をふやしている。

ラクダは，輻射熱の侵入を少なくするために背中の毛が多く，ゾウは草や砂を背中にかけるし，小型の有袋（ゆうたい）類では砂にもぐるものが多い。カンガルーなどは岩陰で，野生のウサギは木陰の穴の中で休む。このように，動物たちはそれぞれになんらかの方法で耐暑の術をそなえている。

暑いと，ヒトでは汗が出る前に，まず皮膚の血管が拡張して，輻射・伝導による放熱をふやしている。動物でも，同じような調節機構がみられる。たとえば，ウサギの耳は長く薄く大きいが，これは暑いときに充血させて，放熱に便利にするためである。寒帯のキツネの耳は，逆に小さくて，放熱をなるべく小さくするようにできている。

汗腺をもっている動物には，ヒツジ・ウシ・ウマ・ラクダ・サル・イヌ・ロバ・カバがある。しかし，他の動物では汗腺はほとんど発達していない。ウサギやネコは，放熱作用をするという意味では汗というものはかかないで，暑くなると唾液（だえき）をたくさん出し，これを身体に塗りつける。カンガルーは少しは汗をかくが，やはり唾液を足底・尻尾・腹部などに塗りつける。ヒトでも，汗腺のはたらきがおかされたときには，唾液がたくさん分泌されるという。

しかし，イヌなどは汗が出るといっても，それは少量にすぎないし，放熱量としてもじゅうぶんでない。これに代わって「パンチング」という浅く早い呼吸をする。「パンチング」により，気道からの水分を蒸発させ，放熱するのである。イヌが長い舌を出し，ヨダレをたらして苦しそうに息をしているのは，よく見る光景である。

サルは汗もわずかだし，「パンチング」もしないので暑さにはまったく弱く，暑いところで追いまわすと，体温が上がって死ぬことが多い。

ヒト型の汗とウマ型の汗

ヒトには2種類の汗腺がある。1つはアポクリン腺で腋の下，下腹部の有毛部，乳首の周囲などにあり，分泌液には有機物が多く，性に関係あるといわれているが，体温調節には直接関係はない。他はエクリン腺で，手のひら，足のうらなど体表面に広く分布し，その数は約230万にものぼる。これが，ヒトの体温調節に関係しているのである。この汗腺は，自律神経のうちの交感神経の支配を受けている。一般には，交感神経が興奮すると，その末端からアドレナリンという物質が分泌され，通常，血管はこれにより収縮する。しかし，汗腺に分布する交感神経は特殊で，アセチールコリンが分泌され，それにより皮膚の血管は拡張して，汗の原料である水をじゅうぶん汗腺に供給しつつ，汗腺を刺激して発汗を

──→＊



サルは，暑さにはまったく弱く，おのずと日陰に集まってくる。伊豆・波勝崎にて　撮影　本誌編集部

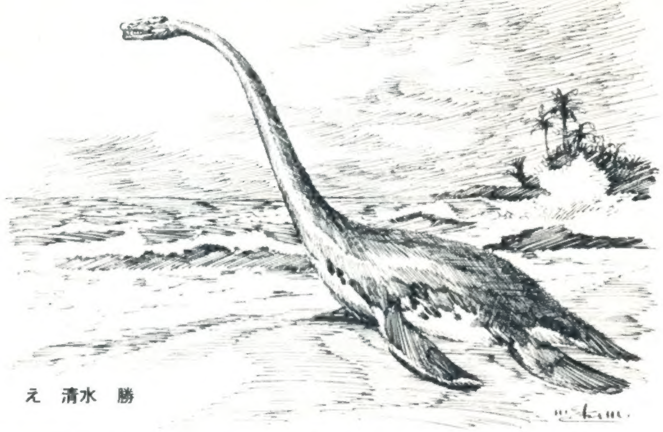
もうひとつの世界

21

グループ・5プラスI

陸生動物の大きさを探る　4　最終回

未来の巨獣は ヘビ形哺乳動物



プレシオザウルス
長頸竜の一属で，首が長くヘビのように動く。全長5メートル。頭が小さいが歯は鋭く四肢はかい状に発達している

え　清水　勝

恐竜以上の巨大な動物が将来生まれるとしたら，どのくらいの大きさで，どんな動物なのかという問題に，さまざまな推測を行なってみた。

最後に，この問題を推理するにあたって，巨大な動物が生まれてきた進化の歴史を振り返って，今後の巨獣の可能性を探ってみよう。

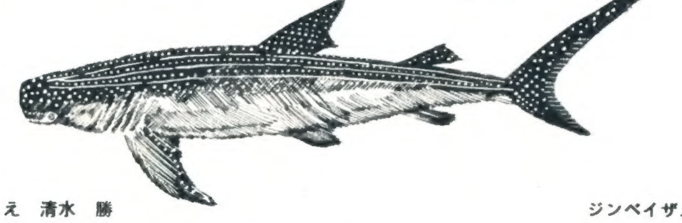
巨大な恐竜が出現したのは，脊椎（せきつい）動物が魚類から両生類に，そしてついに水生から完全に離れて，爬虫（はちゅう）類に進化してまもなくであった。恐竜が脊椎動物の最大に近い大きさになりながら，極限にまで大きくならなかったのは，巨大化につきまとう生理的，機能的弱点もあったろうが，さまざまに進化した同族の爬虫類とのきびしい生存競争が原因になったと考えられる。数々のすぐれた機能をもつ哺乳（ほにゅう）動物は，爬虫類との生存競争に勝った後，肩までの高さ5メートルという巨獣バルキテリウムを生んだ。そして，その後はさまざまに進化した同族との生存競争で大型化できず，やや小型のマンモス，もうすこし小さいゾウがその時代の巨獣になった。

こう考えてみると，次の巨獣を生むはずの新しい種属が哺乳動物よりすぐれた機能をもって出現してもよいころである。次の巨獣は，この新しい種属の出現をまたなければならないが，現在の哺乳類からも，新しい種属との競争に勝って巨獣を生みだす可能性があることを進化の歴史は教えてくれる。その歴史の証人は，爬虫類のヘビである。現存している爬虫類で，陸上生活をしている最大の動物はヘビであり，哺乳類との生存競争にも負けずにかなりの巨大動物になっている。哺乳類の次の新しい種属の動物と競争して巨獣になれるのは，もしかすると哺乳類のヘビかもしれない。

ヘビはいったん水生生活にもどってしまった爬虫類のプレシオザウルスから進化したと考えられているが，哺乳類にもプレシオザウルスと同じく，水生生活にもどった動物がいる。爬虫類の歴史が，原則的には哺乳類でもかなり繰り返されており，今後も繰り返されるとすれば，水生生活にもどった哺乳類から，哺乳類のヘビが進化してくる可能性があるし，その動物はかなりの巨獣になれるだろう。



アナコンダは中南米，おもにアマゾン川流域にすむヘビで体長約10メートル。無毒だが歯が鋭く力も強い。



ジンベイザメは現存する魚類中最大のもので全長は18メートルにも達する。温熱帯の外洋に広く分布する。

え　清水　勝

ヘビ形の動物は胴を地面につけてからだをささえているのだから，長さは，力学的にはどんな長さでも可能である。生理的に長さを制限する要因はかなりあるが，もっとも問題になるのは心臓・血管系と神経系であろう。ここでは，神経の伝達速度がどのくらいからだの長さを制限するかを考えてみよう。

神経の伝達速度は，爬虫類では秒速25メートルである。もし，体長25メートルの恐竜が尾の先端を攻撃されれば，その攻撃を脳で知覚するのは1秒後になる。もちろんその攻撃が脳に伝達される以前に脊髄（せきずい）で反射が起こり，その攻撃に対する第1の反射行動は起こるが，第2の行動，たとえば反撃するか逃げるかという行動に移るのには最低2秒はかかり，生存競争が激しければ，やはり生存には適さないだろう。20メートル強の体長をもつ恐竜には，脊椎骨に第2の脳とも呼べるふくらみがあるが，これは脊髄の反射機能を補強したものではないかと考えられる。

構造上長さの制約のない動物，たとえばヘビとか，水の浮力でからだをささえられていて，力学的な制約のない水生動物の神経の伝達速度と体長の関係を考えてみよう。最大のヘビは10数メートル，水生生活をした爬虫類プレシオザウルスは12メートルであるが，この長さは神経の秒速の半分である。魚類の神経の伝達速度は秒速10数メートルであるが，最大の魚はその半分の8メートル程度の長さである。

哺乳類の神経の伝達速度は毎秒100メートルもあるが，水にすむ最大の哺乳類シロナガスクジラは体長約30メートルで，80トンもあり，これは動物の歴史はじまって以来の巨獣である。哺乳動物では神経の伝達速度の半分にはなっていないが，これはまだ巨大化が可能なのか，それとも哺乳類独特の要因で制限されたのかであろう。いずれにせよ，このような巨体を可能にしたのは，哺乳類の神経伝達速度の速さによることが多いと考えられる。

空想の哺乳類のヘビの長さも，これにならって神経による伝達の秒速の半分，すなわち50メートルとしてみよう。水中にすんでいればからだの構造で体重をささえる必要はなく，シロナガスクジラのような巨体が出現したし，陸上でも胴で体重をささえるヘビなども，力学的に長さの制限はない。しかし，水中にすんでいる動物とは違って，ヘビでは太さには限度がある。

ヘビのからだは筋肉による内圧で形を保つミミズのような方法と，骨格でささえる脊椎動物と同じ方法の混合でささえられている。まるで水枕（みずまくら）の中に傘（かさ）を入れたような構造である。このような構造でささえられる動物の胴の直径の可能性は，3,4メートルぐらいと考えられる。余裕をみて，この動物の太さを直径2メートルぐらいとすれば，強度は，胴の単位長さ当たりの重量の2倍はささえられよう。だから，この哺乳類のヘビは太さ2メートル，長さ50メートル，重さ100トンもの巨体になることができる。

このような動物は，クジラなど水中の生物と同様に，肺とか心臓，消化器の大きさは，構造上かなり余分にもてるはずなので，ほぼこの大きさに近い動物が実現するかもしれない。■　（G）

---

* ——→
促すわけである。

ウマやその他の動物は，すべてアポクリン腺で，これも交感神経の支配を受けているが，ヒトのように神経的に敏速に暑さに対応して，汗を分泌し調節することはできない。また，汗の量もヒトほど多くはなく，暑さに対する汗というよりも，運動に対する汗なのである。つまり，運動すると交感神経全般が興奮し，副腎髄質（ふくじんずいしつ）からアドレナリンが放出され，これが血流にのって汗腺に到達して汗腺が刺激される。

このような汗の分泌のしかたを液性分泌といい，ヒトのように神経による分泌を神経性分泌という。これらを比較すると，神経性のほうは敏感に暑さに反応し，汗腺をとりまく血管も拡張するので能率がよいが，ウマでは血管は収縮し，反応も遅鈍であり，運動のときにしか出ない。しかし，こと運動に対する汗に関して，ヒト以外の動物では，ウマがもっとも発達しているが，ウマを筆頭として，他の動物はみなアドレナリン性，液性の汗しか出ない。ヒトはその意味では，もっとも発達した汗腺を有するといえる。

もともと，エクリン腺とアポクリン腺が両方存在していたのが，ヒトではアポクリン腺が退化してエクリン腺が優勢になり，ウマなどはその逆になってしまったのである。ヒトのエクリン腺も，実験的にはアドレナリンの局所注入によって少しは発汗するが，これはむかしの性質が少しは残存しているからだろう。いずれにせよ，体温が一定で，しかも脳の活動が少しも変わらず，盛夏でも元気にヒトが社会活動できるのは，まったくこのエクリン腺が発達したおかげなのである。■　（名古屋大学教授）

アメリカミンク *Mustela vison*

アメリカミンクは，ヨーロッパミンクによく似ていて，それより少し大きい。野生のものは，全身ほとんど濃い褐色をしているが，あごとのどの上が薄くなって，腹部に白っぽい模様のあるものがある。その毛皮はとても珍重されていて，商品価値からいえば，クロテンのすぐ次にランクされる。

野生のものには，14以上の地方的亜種があって，アラスカからフロリダ，カリフォルニアにいたる，北アメリカ全土にすんでいる。

この地方的な亜種は，それぞれの動物集団が，地域的に定着していて，他の集団と交流がないため，その地方だけで近縁関係にある種が交配して，年を重ねるとともに，細かい特徴が発達してできあがったものである。

アメリカミンクは，沼地や川岸で生活することが多く，よく急流や滝の近くに巣をつくっている。泳ぎが達者で，深いところまでもぐるが，長い間水につかっていることはできない。また，かたい地面の上でも，敏捷に動きまわる。しかし四肢（しし）が短く，速く走ることができないので，敵に追いかけられると逃げ切れないし，指やつめの発達が悪いから木に登れない。最後の手段としては，臭いにおいを放って身を守る。

適当な自然の穴が見つからないと，カワウソと同じように，木の茂った土手に穴を掘って巣をつくる。とくにマスクラットの穴が好きだが，木のほらやトウシンソウの茂みにおおわれたヤナギの根もとにできた穴でもあれば，それでまにあわせてしまう。

貪欲な活動家

ミンクは，きわめて活発に運動する動物である。これという理由もないのに，夢中でとんだりはねたりして楽しんでいる。冬になると，雪の積もった斜面を楽しそうにすべりおり，オコジョがやるように，雪のなかにもぐっては，数メートル先でひょいと顔を出す。

野生ミンクのおもな食べ物は，魚類，カエル，毒のないヘビ，水辺に生活しているネズミなどの動物である。

ビーバー，マスクラット，ミンクの３種のあいだには，興味深い一種の連鎖関係がある。はじめ川岸にやってくるのはビーバーで，そこでダムをつくるなど，川の改修作業を続けて，水の流れを変えてしまう。この改修作業の終わった川に，マスクラットが喜んですみつく。するとミンクがやってきてこのネズミを食べる，というわけである。

ミンクは，トウシンソウの茂みに巣をつくる鳥を襲うだけでなく，場合によってはニワトリやアヒルなどの家禽を襲うこともある。また砂を掘って，ミミズなど土中の小動物を捜しだすこともある。要するにこの肉食動物は，自分のまわりにいる生きものを，なんでも食べているのである。

ミンクは，生まれて１年たつと繁殖を始め，交尾期は２月から３月である。このころ北国では，雪の上に，興奮して駆けまわったミンクの足跡がたくさん残っている。またこの時期には，雌は巣穴の中に隠れているが，雄はよく群れをつくって，川の流れに沿って気違いのように駆けまわって雌を求める。雌を捜すためなら，自分のなわ張りを離れて，見知らぬ土地へも出かけていく。

交尾の時間は長く，30～40分つづく。これは，イタチ科の動物に共通してみられることだ。ミンクは一夫多妻で，雄はたくさんの雌と交尾する。ミンクの妊娠（にんしん）期間は，排卵の時期や受精卵の着床がはっきりしないが，39日から78日の間と考えてよい。１回で，10匹もの子を生むこともあるが，４，５



アメリカミンク。イタチ科。
ミンクの毛皮とは，この動物のものをいう。
美しい色つや，なめらかで
吸いつくような短毛の手ざわり
これが，ご婦人がたにため息をつかせているのだ。
PH. LE CUZIAT RAPHO



匹の場合が多い。子どもは目を閉じたまま生まれ，1か月は目が開かない。しかし，その後の成長は早い。5週間で離乳し，6週間から8週間たつと穴から出る。

飼育して毛色をくふう

ミンクは，子どものときに捕えるとよくなれ，すっかり飼育生活になじむ。こうしたミンクの性質と，野生のミンクからは，傷のない皮がなかなか手にはいらないこと，また，そのすばらしい毛皮に対する需要の高まりなどが原因となって，19世紀の終わりに，この動物の飼育が企業として試みられるにいたった。何回か失敗した後，飼育の技術はだんだんと改良され，はじめの予想とは異なって，今では高地や低地をとわず，さまざまな気候条件のもとで試みられている。飼育はアメリカ，カナダ，スウェーデン，ノルウェー，デンマーク，ソ連，フランス，イタリア，日本などで行なわれている。

何代も飼育されているミンクは，野生からならされたミンクとは，かなり違った特徴をもっている。いわゆる突然変異型(mutation)といわれる，選択飼育の結果により得られたミンクは，体毛の色彩に遺伝的にはっきり固定したものがあらわれる。飼育者は，多種多様な毛皮の種類をつくりあげた。

パステル，サファイア，ゴールデン・クロス，スカンジナビア・パフ，シルバーブルー，パロミノ，アリューシャンなどがそれである。これらは，いずれも飼育中に変異したものを選択し，念入りにつくりあげたものである〔注1〕。たとえばローヤル・パステル種は，1936年，カナダの飼育場にあらわれた突然変異を固定したものである。

飼育されているミンクは，雄どうしでいがみあわないように，雌雄をつがいにしておくことがあるが，ふつうは雌も雄も別々におく。食物はさまざまである。野生状態での主食は肉と魚だが，飼育下の場合は，野菜と穀物を混合して与える。また，からだを大きくし，多産でじょうぶな品種をつくるために，飼い主はよく野生のミンクを捕えて，これと交配させ，血統の更新を行なう。

1着のコートをつくるのには，70枚以上の皮が必要なので，飼育は盛んになる一方である。飼育が行なわれていなかったら，野生のミンクもしだいに殺され絶滅したことだろう。

アメリカミンク。この個体の毛色はパステル・ホセ
その他，サファイアとかダークとか
10数種に及ぶ毛色がくふうされている
体長は50～60センチ，尾は15センチほど
1産平均4.5子で，5月ころ出産する
PHOTO CEZAR RAPHO





イイズナ *Mustela nivalis*

イイズナは，別名，コエゾイタチともいう。体長は10～30センチ，尾長は4，5 センチである。からだが並みはずれて細長いので，その姿は実際よりもすらりと見える。事実，頭部と首だけが特別長く，まるでヘビのようなからだに，きわめて短い，小さな四肢（しし）がついている。

足には鋭くとがったつめがはえ，足うらにはかたい肉こぶがあり，その間に毛がはえている。からだの割りに短い尻尾は，だんだんと先細りになっている。まるくて，ひろがった耳は，頭部のずっと後ろについている。目は小さく，強く光っている。

からだは，約５ミリの短く，なめらかな，赤みがかった褐色の体毛でおおわれ，腹部と四肢の内側は白い。冬になると毛が抜け変わって，全身白色になる。オコジョと異なって，尾の先端は黒くない。

イイズナは地球上で，もっとも広く分布している食肉類の一種である。ヨーロッパ全体，中国と日本をふくむアジアの大半，北アメリカの各地で見かけられる。

平野，山地，広い田畑，深い森林など，人間がすんでいようがいまいが，どこでもかまわずにすんでいる。巣は積み重なった石の下や，くずれた古い壁のなか，川の土手，他の動物の巣穴のトンネルの中につくる。

ネズミとウサギの天敵

イイズナは冬になると，小屋，ウマ小屋，納屋などにはいりこんで，人間がほうっておけば，日中でも獲物をあさる。

そっと近づいていくと，巣の近くでその姿を見かけることができる。しかし，怪しいけはいを感じとると，あたりのようすをうかがおうとして，すぐに後肢（こうし）でからだを立て，こっけいなしぐさで身構える。そして侵入してきたものを見つけるとじろじろ見まわし，おこって猛烈な勢いでとびかかることもある。イイズナはとても勇猛で，人間に襲いかかることも，珍しくない。巣の近くを通るウマや家畜の脚（あし）に，がぶりと食いつくこともある。最後の手段として，スカンクと同じように，臭くて黒い分泌（ぶんぴ）物を，肛門腺（こうもんせん）からぱっと敵にあびせかけて身を守る。

敵に出会った場合，イイズナは勇気だけでなく，あざやかな機転をつねにはたらかせ，最悪の事態を切りぬける方法を見つけるし，猛禽類のつめに捕えられても決して弱みをみせない。オオタカだけが，その比類のない力のために，あぶない目にあわずにイイズナを襲うことのできる，ただ１つのものであろう。

他の鳥たちは，あべこべにイイズナにやられてしまうことが多い。その場に居合わせた人の話を紹介してみよう。１羽のトビが畑に

イイズナ。イタチ科。別名コエゾイタチ。
食肉目のうちで最小の動物である。
体長10～30センチ，尾は4,5センチ。
ユーラシア北部に広く分布している。
PH. A.FATRAS

イイズナ。からだの色は，あご，腹部と
四肢の内側が白く，上面は赤褐色である。
首が長く，ひょうきん者に見えるが
実は，鋭い歯と肛門腺からの悪臭をもつ
《小さな猛獣》である。
PH. G.QUEDENS





急降下してイイズナをつかまえ，空中に飛びあがった。ところがまもなく，飛び方がおかしくなった。しばらくすると，トビは落下して死んだ。驚いてそばへいってみたところ，イイズナが地をはって，逃げていったというのである。イイズナは飛んでいる敵ののどをかみ切って，危機をのがれたのである。

イイズナが，自分より大きい哺乳（ほにゅう）類，たとえば，大きなネズミと戦って勝ったような例は，ほかにたくさんある。

イイズナは，ハツカネズミやいろいろな種類のネズミ，ときにはモグラ，ノウサギ，アナウサギ，ニワトリのひな，ハト，野鳥などを容赦なく殺す。

またトカゲ，アシナシトカゲ，毒のないヘビ，マムシまでがえじきになる。しかしマムシにかまれて，よく命を落とすことがある。そのほかカエルや魚類を食べる。

とにかく肉が好きで，そのためには自分たちのあいだで共食いまでもするほどである。カニの殻をわけなくくだき，昆虫（こんちゅう）類なら，たいてい喜んで食べてしまう。それに鳥の卵を割って，中身を一滴もこぼさずじょうずに吸う。

敏捷に走り，泳ぎもうまいので，獲物を襲うときも，敵から逃げるときと同じ力をじゅうぶんに発揮する。ウサギのような，自分よ

イイズナ。イタチ科。
かれらの巣は，樹木の空洞や
積み重なった石のあいだ，あるいは
ほかの動物がすんでいた穴につくられる。
PH. MERLET-IMAGES & TEXTES



イイズナ。このいささかユーモラスな動物は
その勇敢で激しい気性を、よくかくしている。
自分より大きいノウサギやネズミでも
ためらうことなく襲いかかるほど
PH. HEMPEL R.T.H.S



り大きい獲物に対しては，群れをつくって襲うことが観察されている。このことから，同じ家族のイイズナたちが，かなり重要な意味をもつ共同生活をしている，ということが説明できる。

また，イイズナが鳥類，とくにウズラの類，ツグミ，それに各種のスズメに近寄って，催眠術をかけるように，からだをくねらせて奇妙なダンスをしながら，目ざす獲物の注意をひきつけているのが目撃されている。このダンスに好奇心をもって近づいた鳥は，ガブリとやられるのである。

発情期は，ふつう3月から4月の間である。5週間の妊娠（にんしん）期間が終わると，4～7匹の子が生まれる。

子どもは，わら，干し草や木の葉を敷いた人目につかない場所につくられた巣の中で，目があかないまま生まれてくる。母親は，子どもにこまかい注意をはらう。2か月ばかり乳をやり，離乳したあとでも数か月は，ハツカネズミや野ネズミなど，生き餌をやって養う。子どもが危険になると，1匹ずつ口にくわえて遠くへ運び，万一の場合は，驚くほどの勇気を発揮して子どもを守る。

捕えて飼いならしたイイズナには，なかなかお目にかかることができない。自由を奪われた生活には耐えられず，すぐに死んでしま

イイズナ。狩りはお手のものだが
泳ぎもまた，なかなかどうして
自分のからだの倍もあるような魚をつかまえて
むさぼり食っている場面を見れば
かれの泳ぎのお手並みは拝見できたようなもの。
PH. J. BURTON/PHOTO RESEARCHERS





[illegible]

[illegible]の出産は，5月ごろ，1年4[illegible]の[illegible]は，[illegible]などの生き餌で，子を育てる。[illegible]は[illegible]，寿命は野生で10年ほど[illegible]

PH. J. MARKHAM

うからである。しかしまだ乳を吸っている，ごく小さいうちなら，子を生んだばかりのネコにめんどうをみさせて育てることができる。こうして成長したイイズナは，よく人になついて，飼い主の気を引くことを覚える。

よくなれたイイズナを飼っている婦人が，こう語っている。「……わたしのイイズナの性格を貫いているのは好奇心です。いうまでもなく，わたしにはあふれるばかりの愛情を示します。おりから出して運動させてやると，なんにでも興味を示します。木の割れめや穴，いろいろなものをよくよく観察します。もし偶然に，だれかが自分のやっていることを見ていると思うと，すぐにやめて，眠ってしまいます。目をさますと，すぐにまた奇妙な動作を始めます。

いらだたせたり，おりの中に閉じこめられたとき以外は，ふきげんなようすをみせたことは一度もありません。きげんの悪いときは，小さくうなって不満を訴えますが，これはうれしいときの声とはずいぶん違います」

イイズナは，じゅうぶんに気をつけて飼ってやれば，飼育箱の中でも，4，5年は生きている。野生のままなら，10年は生きる。ただ人間が無慈悲に狩りとるため，この哀れな動物は，ほとんど若いうちに殺されてしまう。

たしかにイイズナは，ときおり家禽を襲うことがあるが，有害な動物を駆除するのに役だっていることを思えば，イイズナによる損害など，ものの数ではない（注2）。

むかしイイズナは，世間で奇妙な迷信の対象になっていた。たとえば，そのからだのさまざまな部分は，ききもしないのに，病気の治療に使われていた。ある地方の農民たちは，イイズナがいることは，自分たちの家や畑に幸運をもたらす前兆だと考えているほどだ。

[illegible]は，[illegible]もっとも広い地域に[illegible]している[illegible]である。平野，[illegible]，そして森林など[illegible]，[illegible]鳥の[illegible]

PH. M. PASOTTI



…の北部と
…が布している
…よ15～30センチほどで、雄のほうが大きい
…春先と晩秋に毛が抜けかわる





オコジョ *Mustela erminea*

オコジョ〔別名，エゾイタチという〕は，からだ全体の格好といい，生活の習慣といい，イイズナによく似ている。しかし，イイズナよりも大きく，10センチの尾をふくめて，全長は40センチに達するものがある。

夏の間は，頭部から背中一面にかけてと，尾の根もとから半分までのところが，赤みがかった褐色になる。腹部は白く，四季を通して尾の先だけは黒く，きわめて特徴的だ。

1年に2度，春と秋に毛が抜けかわる。このときには体毛が全部はえかわり，冬になると，尾の先だけは依然として黒い毛がはえるが，あとは全部白くなる。抜けかわらないのは，感覚毛（まゆ毛とひげ）だけである。

春には，毛の抜けかわりが，ゆっくり行なわれ，背から始まって，腹部で終わる。秋の抜けかわりはもっと速く，春とは逆の順序で行なわれる。冬毛は，夏毛にくらべるとずっと太い。

毛の抜けかわりは，気温の変化から起こるのではない。人工光線を使った最近の実験によって，日照時間の変化に左右されることが証明されている。寒さは，動物たちを長い間巣に閉じこめて，日光をあびる機会を少なくしてしまうだけで，間接的な影響を与えるにすぎない〔注3〕。

毛が抜けかわる時期には，からだに縦縞の模様が出てくるが，他の時期にはこの模様は出ない。これは，他のイタチ科動物にもよくみられる現象である。

オコジョの生息地域は，イイズナとほとんど同じだが，南方にはいない。ヨーロッパ，日本をふくむアジア北部，それに北アメリカにすんでいる。山地が好きなようだが，牧畜地帯や耕作地帯にも多くみられ，イイズナと同じように，変化に富んだ，さまざまな風土によく適応している。

日中の大半を，地中の穴や古壁にあけた穴の中で，あるいは，内部が空洞になった木，人の住まなくなった家などで，人目につかないように過ごしている。しかしまっ昼間，オコジョを見かけることもある。夕方になると，壁や茂みに沿ってはうようにして進み，周囲をよく見ようとしてちょくちょく立ちどまり，ネコよりもっと極端に背を丸める。最後に，ネズミの巣やモグラの穴の入り口で，あるいは岩の割れめで獲物を待ち伏せる。

オコジョは少しの間も，じっとしていない。立ちどまっているときでも，目や耳や鼻は動きつづけ，あいきょうのある小さな頭を，すばやく左右に動かしている。機敏に走っては跳ね，一瞬のためらいもなくみごとに木に登り，広い川も泳ぎ渡る。

気が強くて人にも反撃

気性も強い。イタチ科の他の動物と同じように，オコジョもむてっぽうなまでに大胆で，すこぶる残忍である。なにひとつ恐れず，どんな敵にも立ち向かい，危険を感じると，人間に対しても思いきって攻撃をしかける。

ある動物学者は，2匹のオコジョに出会った農夫の話をしている。石を投げて1匹を傷つけたところ，残りの1匹が農夫の肩にとびかかって，えり首にかみつこうとした。そのうえ，仲間に危険を知らせようとして，独特な叫び声をあげた。すると突然，近くの茂み

オコジョ 冬がちかづくと，からだはまっ白になり
まわりの景色にとけこんでしまう
春になると，また茶褐色に変化して
草むらや木のほらの色に同化する
しかし，尾の先だけはいつもまっ黒だ（上下2枚）
PH. VISAGE JACANA ; PH. G. QUEDENS

アメリカミンク イタチ科 色はシルバーブルー
この毛皮の人気は，たいへんなものであるが
もしもオーバーコートをつくるとすれば
70～80枚の毛皮が必要である

イイズナ イタチ科
木のほらからのぞいているかわいい顔は
ハツカネズミと見まがうほど
敏捷で，悪臭のある分泌物を発射して敵をかわす
そのためか，決定的な天敵がいない 26-10









から何匹かのオコジョがおどりでて、仲間を助けようと突進してきた。幸い農夫は厚着をしていたので、どうにか身を守ることはできたが、顔や両手、首に裂傷を負い、やっとのことで逃げだしたのである。

オコジョも、恐怖に襲われると、身を守るための武器として、肛門腺(こうもんせん)からの臭い分泌(ぶんぴ)物を出すことがある。

オコジョは、哺乳(ほにゅう)類、鳥類、両生類などの、捕えられるかぎりの小動物を、なんでも食べてしまう。おまけに、ノウサギやヘビのような、自分よりからだの大きな動物さえも、恐れずに襲うことがある。

ある動物学者の話によると、ある晩のこと、ノウサギの苦しそうな鳴き声が聞こえた。急いで外へとびでたところ、ノウサギが走りさっていくのが見えた。その首には、小さな動物がヒルのようにくっついていたが、それがオコジョであった。

別の学者は、ノウサギを殺して、その血をなめているオコジョをつかまえたと報告している。また、行く手をふさいでいたウマにかみつこうとしたオコジョを見た、という人もある。

オコジョはネズミをつかまえるのに、そのきわめて鋭い嗅覚(きゅうかく)を使い、穴の中のネズミが1匹なのか数匹なのかを、においでかぎわける。何匹もいるとわかると、ためらわず穴に忍びこむ。ドブネズミを捕えるときは、しつこく襲いかかり、川まで追いつめる。オコジョが2、3匹いれば、ドブネズミの群れを全滅させることもできる。自分で食べきれないほどの獲物を殺したときは、巣にもっていって、わらや干し草をかぶせて隠しておくこともある。



獲物を前の催眠ダンス

イイズナと同じように、オコジョも、獲物の前でさまざまな演技を巧みにやってみせる。この演技は、獲物を捕える実用的な手段として役だっている。つまり、獲物にしている動物、とくに鳥類や齧歯(げっし)類の前で、オコジョは奇妙で幻惑的な、ダンスをする。おどりかかってかみつけるほどに近寄るまで、からだをねじ曲げ、向きをひょいとかえたりして、そっと近づいていくのである。

実際に、飼育場のウサギが10匹ぐらい、この奇妙な見せ物に惑わされ、そのうちの1匹はオコジョのえじきとなって命を落としたという。ウサギにしてみれば高い見物料を払わされたという例もある。

限られた地域にすむオコジョの数が、著しく増減することが確認されている。数年間は極端に数が少なく、他の数年間は数が多い、というぐあいである。それは、カタツムリが間接の原因になっているのかもしれない。事実、湿度の高い年には、カタツムリの発生が豊富になりオコジョはカタツムリを常食にするが、この食物が寄生虫の中間宿主になっている。この寄生虫がオコジョに移り、オコジョのからだに障害を起こして、しばしば死をもたらすのである。

オコジョは、多くのイタチ科動物と同じように、受精卵の子宮内着床が生息地の条件によって異なり、そのため妊娠(にんしん)期間は200日から340日と、一定していない。

5月になると、モグラなどの穴に母親がこしらえた巣で、4、5匹の子どもが生まれる。子どもは注意深く育てられ、冬が近づくころに母親のもとを離れる。それまでに子どもはかなり大きくなり、母親は子どもに、自分が身につけている生活に必要な知識を、すっかり教えこむ。子どもは賢く、のみこみが早い。わずかな期間で、母親に対抗できるくらいの勇気、器用さ、ずるさなどを身につける。

飼育されていると、あまり長生きしない。とくに成長してから捕獲された場合には、なおさらである。おこりやすく、食物をいっさい受けつけず、生理的な変調を起こして死んでしまう。ただ、生後まもなく捕えられたオコジョなら、飼い主によくなつく。

むかしオコジョの冬の毛皮は、純潔と潔白のシンボルとして、今日以上にもてはやされ、君主や貴族の持ち物であった。この毛皮は今世紀のはじめに大流行をみたあと、今日ではヨーロッパ各地の寺院で法服につけられ、その権威をいちだんと高めている。

オコジョ　イタチ科
イタチという別名が示すとおり
北海道と本州北部にも生息している
毛皮のため乱獲され、その数が激減したので
狩猟指定によって保護されている（26 11）
PH.

イタチ科
アの温帯地方、岩や木のほらにひそむ
体長は約40センチ、尾長15セ　ほど
木登りだけではなく、跳躍、水泳、
いずれも達者である。(左
PH.

イタチ科
両手で押えているのは、カモメの卵
自分のからだの半分もある大きな卵を
てすに割ってのんでしまう
イタチ科の動物はみな、鳥の卵が好きだ
PH. WALT DISNEY PROD.







ケナガイタチ　*Mustela putorius*

ケナガイタチは，そののびきったからだ，短い四肢（しし），長いつめ，扁平な頭蓋（ずがい）骨，小さくて生き生きした目，ふんわりとした尾，なめらかで密生した絹のような毛などをみると，イタチ属のリーダー格と考えられる。全長約55センチのうち，尾長は15センチある。

イタチ属とテン属（テン，ムナジロテン，クロテン）とは，歯の並び方で区別できる。イタチ属では，3対の小臼歯（きゅうし）が上下のあごに並んでいるが，テン属では4対である。またイタチ属では，34本もの歯が密接してはえていて，頭部がずっとひろがり，鼻先が著しく短くなっている。

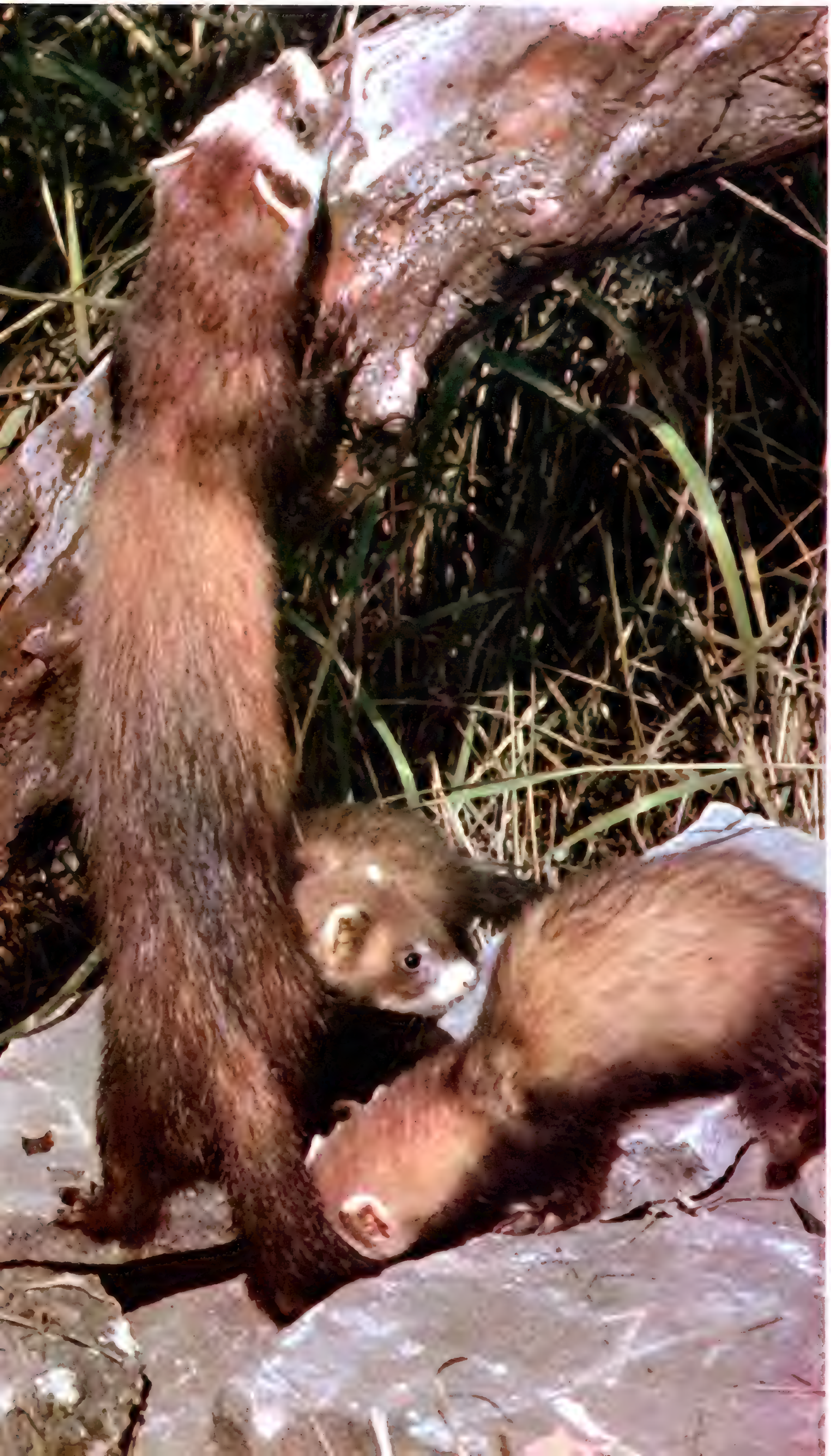
肛門腺（こうもんせん）が発達していて，そこから臭気のある液体を分泌（ぶんぴつ）する。ヨーロッパ産のイタチ科動物が全部そうであるように，この動物の外耳には，内側のへりに《ポケット》と呼ばれる折りめがはいっている。

[illegible]



[illegible] Putois [illegible]

26　15



ケナガイタチの特徴は、その色彩にある。イタチ科の仲間とは反対に、背よりも腹のほうが色が濃い。体毛は黒っぽい褐色だが、頭部から背にかけてくり色に変わっている。頭部には、不規則に白いまだらがいくつかあって、耳のへりは白い。

体毛のうち、下毛は上毛よりも色が薄いので、からだの色合いは、季節によって違ってくる。冬には、下毛が密生して長くなり、色合いが明るくなる。

野生のケナガイタチは、ヨーロッパの温帯地方や、ヒマラヤ以北のアジアに、広く分布している。温暖な季節には、人家の近くの森にすみ、自然にできたほら穴や木のほら、積み重なった柴などのなかにすんだり、ウサギを食い殺して、その穴を使ったりしている。

冬になると、人の住まなくなった家に隠れたり、農家にやってきて納屋や屋根裏にすみこんだりする。

動作は、どんなときでも軽快で、すばやく確実である。どこにでも忍びこみ、すばらしい跳躍をみせる。ごく狭い軒端をあざやかに走り、むぞうさに木によじ登り、泳いだり水にもぐったりするのもうまい。しかも、このうえなく慎重ときている。攻撃するときは力いっぱい戦い、臭気のある分泌（ぶんぴ）物を放つと、どんな猛犬でも戦意を失ってしまうほどだ。

アナグマと同じように、傷や打撲からの回復が早いことは、生きながらえるのに有利な条件となっている。そのかわり、ケナガイタチにとって猛禽類は、まったく恐ろしい大敵で、どうしてもかなわない。

奇妙な習慣をもち、次の3つの状況にたちいたると、きまってあとずさりするという。第1は、仲間とふざけているとき。第2は、身を守るときである。このときには、肛門腺（こうもんせん）からの分泌物を発射しようと身構え、あとずさりをしながら、おどすような叫びをあげ、毛をさか立ててきばをむきだす。第3には、排泄の場所を捜すときである。

ケナガイタチは、消化がきわめて早い。食べてから1時間もすると、食物がこなれて、排泄物として出てくる。地面の盛りあがったところや、石、土のかたまりなどに、尾を立ててあとずさりしながら近づき、その上に排泄する。

食欲を越えた殺しの本能

夜行性で、日中は巣の中で過ごし、夜になってから獲物を捜しに外へ出る。昆虫（こんちゅう）類、魚類、カエル、果実とくにブドウが好きで、ときには蜂蜜などを見つけて食

ケナガイタチ　イタチ科。1産3～7子で
3か月で成獣になり、すぐに巣立っていく。
ふつうは単独で生活しており
イタチの仲間に共通な、無類の殺戮者である。

PHILIP WAYRE NHP AGENCY



べる。爬虫（はちゅう）類も食べ，マムシさえ襲う　というのは，ハリネズミやマングースと同じように，マムシの毒に対して，ある程度の免疫性があるからという

しかし主食はハツカネズミや野ネズミなどで，これらの繁殖力おう盛な齧歯（げっし）類の動物たちにとっては，これは恐ろしい殺し屋である。小型の食肉類のほとんどが，ネズミを殺すだけで満足し，においを敬遠して食べないことが多いが，ケナガイタチはためらわずに食べてしまう

ケナガイタチが齧歯類と向かいあったときの行動は，まるで儀式をやっているようである。すなわち，獲物の首の動脈に歯を立てて，出血させ，死ぬまで待っているのである。この儀式は，母親から教えられた知識なのかもしれない。というのは，親から離れたまま成長した子どもは，自分かってなやりかたで，獲物のあちこちにかみついているからである

ケナガイタチの狩猟本能は，食欲に関係なくたえず目ざめている。満腹していても殺すことをやめないし，あとで食べようとして，獲物を隠しておく。これが儀式の最後の場面である。ニワトリ小屋を襲ったときには，獲物を隠すことはしない。ここでは，すべてのニワトリの首に歯を立てて出血させ，その場に倒すので，大量の犠牲者の返り血をあびることになる。しかし犠牲者をくわえて運んでいくには，大量殺戮のためにあまりにも疲れてしまうのである

ケナガイタチはヒルのように，動物の血を吸うと，長い間信じられてきたが，これは正しくない

ケナガイタチは単独で生活し，雌雄も生殖や子どもの養育に必要な時期だけしかいっしょにいない。交尾期は３月から６月にかけてである。ふつう，雌は年に１度しか発情しないが，受胎しなかったときは，その年の間に２度めの交尾期を迎えることがある。交尾につづいて，直ちに排卵が行なわれ，妊娠（にんしん）期間は６週間つづく

１腹に３～７匹の子どもが生まれる。生まれたばかりの子どもは，耳も聞こえず，目も閉じたままで，からだは白いうぶ毛でおおわれている。20日間の哺乳（はにゅう）が終わっても，子どもの目は閉じたままだが，このころから固形物を食べ始める

子どもは３か月たつと，おとなと同じ体重になり，家族は分散する。だから両親との同居期間は，４か月余りということになる。９か月たつと生殖能力をもつ

家禽小屋をよく荒らしまわるので，人間はケナガイタチを退治しようとする。しかし，ケナガイタチはネズミを退治する動物として役だっているのだから，むしろニワトリ小屋，ウサギ小屋，ハト小屋の囲いをもっと厳重にすることに努力し，イタチ退治はやめたほうがよい

毛皮は暖かく，しなやかでじょうぶだが，においがあるために，さほど珍重されない。テンやアナグマと同じように，尾の毛は絵筆に使われる。肉は食用になるどころか，イヌさえも食べようとはしない

ケナガイタチは飼いならしやすいが，その悪臭と，家禽を襲うために，ペットにはむかない動物だ

ケナガイタチは，食べたものを
１時間ですべて消化するという
おもな獲物はネズミなどで，木陰や
石のあいだでしんぼう強くねらっている。
PH. L. B BLOSSOM NHP AGENCY



フェレット　*Mustela furo*

動物学者は、今ではフェレット（別名フイッチ）を、ケナガイタチの変種とみなしている。色素欠乏や、寒さに敏感で多産な性質は、確かにケナガイタチとは異なっている。しかし一方では、ケナガイタチとフェレットのあいだに、多産な性質をもった雑種をつくった。この雑種の色合いが、純然たる褐色になる（つまり白色は遺伝的に優性ではない）ことをみると、フェレットは色素の欠乏を特徴とする、ケナガイタチの突然変異としてあらわれたとも考えられる。そうだとしても、これは人工的な動物であり、人手で飼育されていないと繁殖しない。〔注4〕

フェレットが、いつごろ現われたかははっきりしない。はじめて姿を見せたのは、モロッコかスペインあたりだろう。いずれにせよ、古代人はすでにその存在を知っていたのだから、ずいぶん遠いむかしのことである。

アリストテレスはフェレットを、《イクチス》と名づけて語っているし、プリニウス〔古代ローマの軍人、科学者〕は《ビベラ》と呼んでいる。

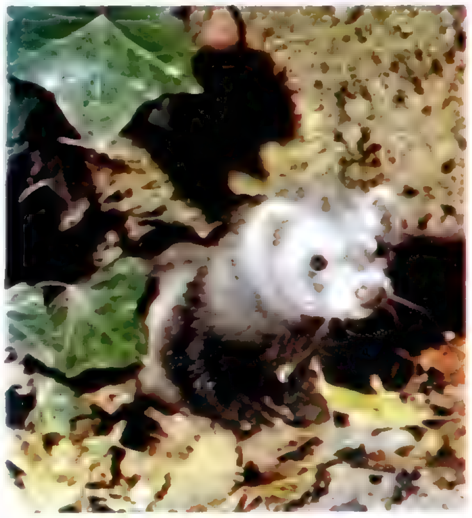
またカエサル・アウグストス〔古代ローマの皇帝〕の治世に、バレアレス諸島〔地中海にある群島〕でウサギが急激に繁殖したので、これを狩るために何匹かのフェレットを放つよう命じたところ、これらのフェレットは、島にあふれていたウサギを、たちまち退治してしまったという。

フェレットの形はケナガイタチに似ているが、少し小さくて、雄でも全長50センチを越えず、からだも弱い。体毛は白か薄い黄土色で、腹部は少し濃く、目は赤い。

その行動も、ケナガイタチに似ている。多少、生気や快活さに欠けるが、粗暴で残忍なところは同じである。学名の*furo*は、《盗人》という意味のラテン語《fur》からきている。空腹でなくても、ウサギ、ハト、ヒナドリなどが近くにいると、みんな殺してしまう。トカゲやヘビを襲い、マムシにまで攻撃をしかける。マムシにかみつかれても、なかなか死なないが、毒の作用で活力をなくし、事実上の不具になる。

ウサギ狩りのための家畜

フェレットは人工的な動物だが、完全に飼いならして、飼い主のうしろを忠実についていくほどにはできない。よく逃げだして、穴の中に隠れてしまうが、寒さには弱いので、やがて冬のきびしさにやられてしまう。ふつう、押し殺したつぶやきのような声を出すが、少しでも苦痛を感じると、それは叫ぶような声に変わる。







26 19



フェレットを飼えば、その習性をよく知ることができる。ケナガイタチは年に1度しか妊娠（にんしん）しないのに、フェレットは年に2度、ときには3度妊娠することがある。交尾期は気候の変化によるのではなく、日照時間の変化によるのである〔注5〕。交尾はきわめて長く、2時間つづく。ケナガイタチと同じように、交尾が排卵を促す〔注6〕。

妊娠期間は42日から45日で、1腹に5匹から10匹の子を生む。子どもは生後3週間たたないと、目が開かない。母親は2か月子どもに乳をやり、注意深く育てる。5か月たつと人間が訓練することができる。

フェレットの健康を保つには、なによりも清潔を保ち、食べ物に気をつけることが必要だ。乾燥した場所で、夏は涼しく、冬は暖かくしてやり、食物にはいろいろな材料をそろえてやる。朝食には白パンと牛乳、夕食には生肉、4日ないし5日に1度は生卵1個、ときどきイチゴ、リンゴ、ナシなどのくだものをそえる、といった献立である。

出産のときには、雄を雌から離しておくほうがよい。父親には、自分の子どもを食べてしまうくせがあるからである。

いたるところでウサギ狩りに利用されているが、イギリスでは、ネズミ退治のために飼育している。

放し飼いのウサギを狩りにいくとき、フェレットの役割は、もっぱらウサギを追いだすことである。フェレットを入れたおりを、ウサギの巣の入り口に置くとか、地下のどこにいるのかがわかるように、鈴をつけたりひもをつけたりして、穴の中に入れるのである。

このねらいは、ウサギをこわがらせることである。ウサギは、隠れ場からあわててとびだして、穴の出口に張りめぐらした網にかかるか、近くから鉄砲で撃たれてしまう。これはスポーツ精神に反し、おそろしく粗暴なやり方だが、密猟者が好んでやる手口である。

フェレット・イタチ科
この動物の学名furoは、盗賊という意味。
その名のとおり、ネズミやウサギを見ると人家のなかへ忍びこんで、殺してしまう。
体長は約35センチで、尾は10センチほど。
PHOTO: B. BLOSSOM NHP AGENCY

日本のイタチ科動物　5

野ネズミの天敵，ニホンイタチ

犬飼哲夫

日本特産のイタチは、ただ1種、ニホンイタチだけである。しかし、今日では大陸からのチョウセンイタチが進出し、九州、四国、中国、近畿地方では、ニホンイタチを山間へと放逐している。

ニホンイタチ
Mustela itatsi

この動物は、さらに3つの亜種に分類することができる。

ホンドイタチ　*M.itatsi itatsi*
自然分布・本州、四国、九州、佐渡、壱岐、隠岐、淡路

オオシマイタチ　*M.itatsi asaii*
自然分布・伊豆大島

コイタチ　*M.itatsi sho*
自然分布・種子島、屋久島

ホンドイタチとオオシマイタチは、いずれも、のど元に白斑があって、体長は30〜35センチ。尾は15センチ。雌は、やや小さい。コイタチは、その名のとおり、からだが小さく、30センチ内外で、のど元の白斑はない。



ホンドイタチ　北海道釧路にて　撮影　田中光常

ことわざにあふれた動物

これらのニホンイタチは、山野、河川など、いたるところにすんでいて、季節によっては人家付近にまで移住するため、人びとに親しまれ、むかしから、いろいろな、ことわざや言い伝えを残してきた。

たとえば、イタチごっこ。これは、追いつ追われつ勝負にならないことをいう。イタチの最後っ屁とは、イタチが進退きわまったとき、肛門腺から悪臭のある分泌物を発射して難をのがれることから転化して、最後の非常手段に訴えることをあらわしている。イタチの道切は音信不通または絶交状態を示す、など数えきれないほどのことわざが残っているくらいだ。

イタチの巣は、倒木の下、自然にできた土中の穴、あるいは人家の家屋の下、物置き、堆積物の下などにつくられる。巣のなかは、乾燥して、落ち葉、枯れ草、羽毛などが敷いてある。繁殖は年1回で春に交尾し、妊娠期間は約37日で、1産1〜8子（ふつうは3〜6子）。

夜行性の動物で、とくに雌はめったに遠出をすることがない。交尾期になると昼でも活動を始めるようだ。

むかし、長野県の農家などには、イタチ笛があって、イタチが昼間あらわれると、スズメが寄ってきて騒ぎたてるのを利用して、この笛を吹いては、スズメを集め、鳥モチや弓でとっていた。

歩き方は半蹠行性で、細いからだではねるように進む。

ニホンイタチとタイリクイタチの分布



原案　御厨 正治（日光、有益獣増殖所）

血吸いの話は伝説

イタチの獲物は、ネズミ、小鳥、ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫、ミミズなどである。木登りと同じように、泳ぎも達者で、魚を捕えて食べることもある。

生き餌を好むが、死んだものでも新しいうちは食べる。夏の間は山野に食物が多く、人家にはあまりあらわれないが、秋から冬にかけて食物が少なくなる時期には、人家に接近して、ニワトリを襲ったり、移動性の高いドブネズミなどの、いわゆるイエネズミを好んで食べる。冬の間、イタチを捕えて、その胃の内容を調べたところ、約50パーセントがネズミの遺物であったほどである。

からだは細く小さく、柔軟で身軽だから、ドブネズミなどの出入りする狭い通路でも、なんの苦労もないのである。

イタチの性質は、その小さなからだに似合わず、獰猛で、一面用心深いところ

→ *

カラーページ注

〔注1〕 **ミンクの名称**　本文にあげたほかにまだ20種以上もある。いずれもミンクの養殖業者が、販売目的のためにつけたもので、ある名称はわずかに2,3年で通用しなくなったり、固定して何年でも通用している名称もある。また、同じ特徴をもった種類に違った名称がつけられ、たとえば黒色ミンクをダーク、あるいはダイヤモンドブラックということがある。

〔注2〕 **ネズミ駆除に役だつイタチ**　イタチは習性上、えさになる動物が眼前に多くいる場合、1匹だけを捕えて満足することなく、手当たりしだいにできるだけ多くを殺して、あとでだんだんと食べる。だからネズミの天敵として、その駆除にはきわめて有効である。北海道の離島、並びに琉球諸島では、イタチのいなかったところに、ニホンイタチを放し飼いして野ネズミ駆除に成功している。

〔注3〕 **毛皮と光線**　オコジョや北方に生息する野ウサギは、冬に毛色が白化するが、それは、敵の目や獲物などから気づかれないという、生存上の理由がある。ところで、白化を促す外的条件は、一般に考えられるような低温度や雪による環境の白化ではない。大津正英氏（日本応用動物昆虫学会誌11巻2号、1967年）のトウホクノウサギを使った実験によると、人工光線による照射時間を自然の日照時間より長くすると、冬の白化がおくれることがわかった。

一方、自然に白化が始まる晩秋期に、日照をさえぎって照射時間を短くすると白化が早まるのである。要するに、毛色を変化させる環境要素とは光線である。

〔注4〕 **動物の名称**　動物の和名には、学名と違って命名上の規約はない。それを付した研究者の主旨でよく、今までの名称に対して、新しい呼び方を使ってもいっこうに問題はない。また、すでに和名があることに気づかずに、新名称をつける場合もある。和名は俗称（ムジナとかオロチなど）とは違うものの、やはり一般名称なので、なるべく一般化するものが望ましい。その点で動物園などで使用される名称の役割は大きい。そうはいうものの、動物の名称には依然として、混乱があるようだ。

ポールキャットとは、ケナガイタチをさすが、アメリカではクロアシイタチのことである。フェレットといえば、ケナガイタチの家畜化したものをいい、フイッチは、このフェレットの別名である。ところが、ポールキャットは、英和辞典で臭猫と名づけられているためか、フイッチをケナガイタチに当てるという混乱もよく見られる。（この項　小原秀雄）

〔注5〕 **動物の性活動と光線**　わが国ではむかしから、ふつうであれば春に発情して鳴くウグイスに、秋から人工光線で自然の日照時間より照射時間を長くして正月に鳴かせることを行なっていた。最近、諸外国でムクドリやフェレットを使って、光線がそれらの鳥や動物の性活動を促すことが、科学的に証明された。

大津氏（日本応用動物昆虫学会誌，15巻1号，1971年）は、トウホクノウサギで、これを確かめている。大津氏の報告によると、12月上旬から、毎日午前9時から午後9時まで、日光と人工光線をあわせて照射したウサギは翌年2月22日に出産し、同じ12月上旬から自然の日照光線だけで過ごしたウサギのほうは、おくれて4月5日に出産したという。

〔注6〕 **交尾排卵**　哺乳類の成熟した卵子が、卵巣から排卵される機構には二通りある。ひとつは、卵子が成熟して自然に卵巣から排出される自然排卵。他のひとつは、卵子が成熟していても、交尾をしなければ排卵しない交尾排卵である。多くの哺乳類では自然排卵であるが、ウサギ、ネコ、イタチ、フェレットなどは交尾排卵である。■　（犬飼哲夫）



ヒグマと2人のイノシシ 24

よだれと白旗

畑　正憲

いくぶん手加減をしたものの，どんべえはまだ赤ん坊だった。平手打ちを食らわした途端，すっとんで腹を上にして転がってしまった。

——いけない。

僕はおろおろして，蜂蜜を指に塗って差し出した。だが次の瞬間，僕は激痛に耐えかね，背をそらせねばならなかった。

どんべえが人差指に咬みついたのである。そして，目を吊り上げて力をこめる。

「コラァ」

僕は指を口の中へ押しこんで，離しざま，思いっきり引っぱたいた。

ところがどんべえは，転んであきらめはしなかった。ますます闘志を燃やしてかかってくる。

一撃また一撃——。

どんべえと僕は，いがみ合う肉のかたまりになって，うなり，わめき，叱咤して懸命にたたかった。

これが野性というものか，僕は殴りながら驚嘆した。上唇をふくらました怒りの表情を収めないし，白旗をかかげないのである。

実に，2時間，僕はどんべえと渡りあった。そして両者とも疲れ，どんべえは妻に水を貰い，僕は沢で冷やしたジュースを飲み，文字通り水入りとなった。

それを見ていて，あまりのすさまじさにシャッターを押すのを忘れた弟が，

「すげえや。知らないぞ，おれは。あんなことをやっていたら，もう少しどんべえが大きくなったら，兄貴は食い殺されてしまう」

「あのヤロー」

と，僕は肩で息をし，

「まったくしぶとい……悪魔だ。平地には住めない異質の動物だ」

「きっぱりと方針を立ててくれよ。どう育てるかプランを立ててくれたら，おれたちは従うから」

「ああ」

僕はうなずいて，疲れて眠ったどんべえを見た。

彼女は目をつむって四肢を投げだしている。ときどき，からだがひくひく動いているのは，人が側にいないせいだ。どんべえはまだ赤ん坊だから，からだに触れていてやると安眠するのだ。

その姿を見ていると，殴ってしまった味気なさがこみあげてきた。

娘でもそうだ。娘は小学校の5年生になるが，手を上げたことは僕には1度しかない。あれは3つになった時だったが，来客を困らせたので，尻をまくって全身の力をこめて引っぱたいた。お尻に僕の手の形が青く残って，半月ほど消えないくらい。

殴ったのはその1度だけだが，ともかく聞きわけのよい子になった。体罰は確かに効果がある。けれどわが子に手を当てるのは辛いものだ。

新たに決心して，僕は弟に言った

「今，反省しているところだ」

「それ見ろ」

「殴ったことじゃない。これから教えますという技術的な殴打を加えたのをおれは残念に思っているのだ。こいつを殺しったっていいじゃないか。こちらが我慢出来るぎりぎりのところで爆発出来なかったのが心残りなんだ。怒る際には，もっと徹底して，こちらの肝っ玉をぶっつ



格闘となると冗談や遊びの気分ではいられなかった　むきだしの野性が闘志を燃やして，とびついてきた

＊ ——→

もある。むかしから，イタチがニワトリ小屋を襲うとき，一晩の間に，全部のニワトリを殺し，そのくせ，ろくに食べもしないので，ただ血を吸うために殺すのだと信じられてきた。しかし，これは，まったくの迷信である。実際にイタチを飼って実験をしてみると，血を吸うような事実は見られない。

数匹のネズミを1つのかごの中に放しておいて，イタチを入れる。電光石火の早さで，ネズミを片っ端から襲い，頸部にかみつき，見るまに全部殺してしまうと，そのあとで1匹だけを隅に引いていって，食べていた。

造林地の救世主

この皆殺しの習性は，どう考えたらよいのであろうか。

イタチが野外で生活しているときは，そうそういつも獲物にめぐり会えるものではない。そこで運よく多くの動物がいたら，まず，できるだけ多く，息の根を止めておいて，獲物が逃げないようにしてから，あとでゆっくり食べる習慣が発達したためと思う。

だから，ニワトリ小屋にはいっても，手当たりしだいに，ニワトリの頸部をかんで，殺し，1羽1羽の血を吸うようなことはしないし，ニワトリの血だけを与えてもそれを飲むことがないのである。

イタチのこうした習性は，人間によく利用され，ネズミ駆除に役だっている。山の造林地などでは，植栽された若い木が，冬の間に根もとの樹皮をネズミにかじられて，枯れてしまい，造林地が全滅したことがあったくらいである。とくに野ネズミは移動性がなく，狭い面積のなかに比較的多く生息しているので，ここへイタチを放すと，たちまち退治してしまう。最近では，強力な殺鼠剤が多く出て被害が，かなり防止されるようになったものの，山奥などの造林地では，人件費や作業の困難から，これもままならない。そこで，イタチが，野ネズミ退治にもっぱら奨励されているというわけなのである。

ホンドイタチは，元来北海道に分布するものではなかった。しかし明治初期の開拓民とともに道内にはいり，約70年前にほぼ全道にひろがった。

また昭和36年から毎年，栃木県日光市の有益獣増殖所からホンドイタチが送られ，すでに1000頭を越えている。

北海道は森林面積が全道の70パーセントを占め，森林が重要資源である。その広い造林地帯を保護するため，野ネズミを駆除するイタチを全道で禁猟にしている。禁猟にしている県はほかにも多い。

ジャパニーズ・ミンクの肌ざわり

イタチの毛皮はすぐれているため，冬季に限って雄を狩猟獣に指定して，捕獲している。

元来，イタチの毛皮はあまり需要がなかったが，アメリカなどで，Japanese mink として歓迎され，日本の重要輸出品であった。第二次大戦前は，50万枚ほどが，毎年輸出されていたほどである。

毛皮の大きさは，アメリカミンクとほぼ同じで，とくに北海道産のイタチは，毛質が良好なため喜ばれていた。しかし，欧米人は，イタチの黄褐色の体色を喜ばないため，これを黒く染めて輸出していたようだ

戦前から，日本では，イタチを毛皮資源として保護していて，雌イタチは全国で禁猟にされている。しかし，戦後は，野ネズミの天敵としての価値が高まっている。こうした理由でイタチの毛皮産出は減少し，1967年で4万3245匹，68年度は3万3650匹，69年度には3万2637匹で，最盛時の10分の1に減少している。

日本じゅうに広く分布する，ニホンイタチに強敵があらわれた。それは大型（体長40センチ）で，対馬，チェチュ（済州）島，朝鮮に分布している，**チョウセンイタチ** *Mustela sibirica coreana* である。タイリクイタチの一亜種で，きわめて生活力に富んでいる。日本へはいったのは戦前で1930年代のことである。阪神地方や九州で野生化したかれらは，しだいに拡散して，九州，四国，中国，近畿の各地で，ニホンイタチを駆逐している。しかし，ニホンイタチを人家や平野からまったく追放したわけではなく，地方によっては共存しているようだ。

習性や生態は，ニホンイタチとほぼ同じで，野ネズミ駆除にも役だっている。■

けようよ」
「……そうかね」
弟は半信半疑だった。
爆発したのは真夜中だった。相次ぐ睡眠不足のため，僕はどんべえが顔の上で遊んでいるのを意識しつつも，ぼんやり夢路をたどっていた。
と，突然，どんべえが顎の先端に咬みついたのである。後で調べると歯が貫通していたが，僕はどんべえの耳をつかんで，一旦顎を口の中へ押しこみ，背を平手で叩いて叫んだ。
「このバカヤロー」
それから僕は野獣になった。無人島であるのを幸いに，生まれてこの方出した憶えがない大声でどんべえをどなりつけた。
むろん，両手を振りかざし，足で力まかせに床をならした。
「コラッ」
喉も張り裂けよとどなった。
「コラッ，さあこい」
はじめ演技している気分がないでもなかったが，怒っているうちに真剣になって，もし襲ってきたら，殺すかもしれぬ打撃を加えるつもりだった。
どんべえは9キロである。観光地で鎖につながれ，自由と引き換えに人に媚を売っている子グマしか知らぬものには信じられぬだろうが，野性をむきだしにして牙をむいた姿は迫力に満ちていた。
「さあこい」
僕は大手を広げ，どんべえを部屋の隅に追いつめた。
どんべえはうなった。上目使いに人を見て，手をふん張り，口をとがらせた。
眠る際，僕はパンツと薄いシャツ1枚である。これなら対等である。皮の衣服で身をくるんで，ムチをふるう調教師の比ではない。
「こい，かかってこい」
とうとうどんべえは，隅に尻を押しつけ，身動きがとれなくなっていた。
僕はかけ声をかけながら，背をかがめて，相手と同じ高さの所へ顔を突きだした。さあ，かかってこい，こちらだってたたかうぞ。
弟が背後で呟いていた。
「どうかな……どうかな。命の危険を覚えさせるような叱り方，いけないのじゃないかな」
妻は押入れの上段，安全地帯でかたずをのんでいる。
と，どんべえは，気力をふりしぼって僕にとびかかる気配をみせた。
「くるか！」
間髪を入れず僕がどなった。
するとどんべえは，僕の顔のほんの手前で口を咬み合わせ，前足で力いっぱい床を叩いた。
「こいっ」
僕はやめない。
「バカモノッ」
目に力をこめて，気力で勝負した。老いたりといえども，気迫の点では人後に落ちないつもりである。
どんべえは，何度も，何度も，僕を攻撃しようとした。そして途中で思いとどまり，力まかせに床を叩いた。
僕との間に，すでに最後の攻撃を行なわせない絆が出来ているのだ。それが僕にはたまらなく嬉しかったが，ここでやめるわけにはいかぬ。僕はヒグマ以上に執拗にどんべえを叱り続けた。
と――，
ほぼ半時間も経った頃，どんべえが顔を左にねじ曲げ始め，表情からけわしさが消えた。うなり声が哀切な長いうめき声に変わっている。力を入れていた四肢も萎え，立っているのが辛そうだ。
それでもなお気合を入れていると，彼女はよだれを垂らし，音を立てて舌なめずりするようになった。うめき声は，女の，鼻で甘える調子になった。
「わかったか，どんべえ」
ついに白旗をかかげたどんべえの頭を僕は撫でた。
かたい，黒い，鋼鉄の頭……。
――済まない，どんべえ。
僕は心の中で詫びた。
――ヒグマは敗北を知らぬ動物だ。それに敗北を知らせることが，いいか悪いかわからない。だけど，敗けて貰わねば，これから一緒には暮らせない。
僕は感傷的になっていた。もう，いいとか悪いとか言っている段階ではなかった。ぶつかりあって，ある関係を樹立しなければならぬ。お互いに辛いし，切ないけれど辛抱しよう。
キャラメルを口で溶かし，僕はどんべえの口の中へ流しこんでやった。するとどんべえは，甘え声を出しながら，無器用にすすり，一部をよだれと共に床に落とした。その姿は，叱られた後で飴玉を貰った人の子そっくりであった。泣きじゃくりながら食べたあのほろ苦い飴の味を僕は思い出して，どんべえを前から抱え頬ずりをした。
島の夜は暗く対岸の水門の灯がかすんでいる。夜に入って霧が出たのだろう。■

鳥獣むかしばなし 4 最終回

くもとなまずのけんか

再話 稲田和子　え 赤羽末吉

むかしむかし，さるむかしのことだがなあ，山の田んぼに水を引くには，井手というものをこしらえたもんですわ。柴をおいて，その上に石をずっと並べて，水をしっかりせき止めたもんですん。
その古い古い井手の，草がグワッとかぶさるように生え繁ったところになあ，大きな，たたみ8畳敷きほどもある水ぐもが住んどったんやて。つまり，その井手の主というわけや。
それからもひとつ下の井手には，古なまずが大きになっておったが，水の深い深いところに，手下をいっぱい連れて住まいしとった。
くもはくもで，子分をぎょうさん連れて，奥の井手でにらみをきかせとるし，2匹の主は仲が悪うて，水争いが絶えなかったちゅう。
くもにしてみれば身内が多いことだし，水をいっぱい貯えとこうと思うて，網を張って，ぺったり坐りこんで，水を下へちっともやらんようにするのや。ほうすると，下の方ではなまずが，
「水がなかったら，わしらの背中が浮いて死んでしまう。しだいに子ができ子ができして，養うものがふえているちゅうのに，えらいことやが。これは明日にでも，くもを退治せんならん」
と言いだしたから，くもは子分を集めて評議を始めた。
「あした，いよいよけんかせんならん。なまずの方が数が多いで，このままでは負けるに違いないが，どうしよう」
「ほんなら上の家へ行って，岩右エ門さんに助だち頼んでこ」
「それがええ，それがええわ」
そこで，くもは夜になると人間に化けて，そこの家へ行ってなあ，わけを話したのや。
「わしは，この下の井手に住んどるくもの主や。あしたの晩，も一つ下の井手から，なまずが大勢攻めてくるが，どうでもこのけんかに勝たなんだら生きておれんのやさかい，どうぞ助けてほしい。ほんでその代り，あんたの田んぼに水がないちゅうことはさせんさかい，お頼みします」
そう言われると岩右エ門さんは，どえらいうれしがってなあ，
「田に水を絶やさんちゅうのは，なんとしてもありがたいなあ。ほんなら，どうして助だちしたらええかなあ」
「別になまずをやっつけてもらわんでもよいが，ドテンドテンと音がしたら，もうけんかをしとるんやさかい，『しっかりせえ，大ぐも，しっかりせえ，ここに岩右エ門が控えとるぞ』と一口言うてもろうたらありがたいで，そんだけ頼みます」
「ほんな，それを言うてやる」
「ほんではあしたの晩，うしの刻に来てくれえ」
「わかった，わかった。かならず行くさかい」
話がすむと，くもはぺたぺた帰っていった。
あくる日，岩右エ門さんは仕事もなにも手につかんで，晩になるのを待っておった。はたしてうしの刻になったら，どえらい音がして，ドーンドン，ドンドン，バジャバジャバジャバジャ，戦争が始まったん。
こわいけれども，あのくもに負けてもろたんでは，自分とこの田に水がこんので，助だちに行かなしゃあない。ほいでまあ，女房子どもを連れて出て行った。
こわいんやけど，ふるえ声でも家内中連れのうて声を合わしてなあ，
「ここに岩右エ門が控えておるぞ。しっかりせえ。大ぐも，しっかりせえ」
と声の助だちしたんやそうな。それからまたしばらく，ドテンドテン，バジャバジャバジャバジャが続いたが，音が止んだ時には，もう夜が明けとったってなあ。
朝の光で見てみると，大きな大なまずがなあ，どでんと腹をかやして死んどったちゅう。
そんだけ。■　（京都地方のはなし）





読者のアルバム　1

カモシカの赤ちゃん　写真と文　工藤習二

青森県平内町にある県林業試験場に，このほどあいついで２頭のカモシカの赤ちゃんが持ちこまれ，係員たちは慣れない生き物の世話にてんてこ舞いさせられている。

この２頭のカモシカは，６月上旬下北半島の六ケ所村，佐井村で，親にはぐれているところを人間に保護された。２頭ともまだヘソの緒がついているところから，林業試験場の人たちは生後２週間ないし３週間と推定している。

現在のところ，このカモシカは乳児用ミルクで養われており，１頭はボールに頭を突っこんでミルクをなめるが，もう１頭はそれができず，授乳に哺乳ビンが使われている。人なつこく，だれにでも頭やからだをこすりつけてあいきょうをふりまく。

相手が特別天然記念物だけに，いつまでも飼っておくわけにもいかず，ひとり歩きできるようになったら，山へ返さなければならないと思われるが，はたして野生にもどれるものか心配である。■

（青森市・37歳・会社員）

仲間のひろば

ピロとタロウ

日本では，１年のうちでも２月から３月にかけての一時期，東南アジア方面からヒナを輸入してくるだけというダルマインコを，ことしもまたわが家では２羽手に入れました。

昨年，やっと羽もはえそろい，よくなついたやさき，ちょっとした不注意から逃がしてしまった苦い経験があるので，小鳥屋の店頭に「ダルマインコのヒナ入りました」の看板が出るまで，首を長くして待っていました。

わが家にきたばかりの赤裸のころには区別がつかなかった２羽のダルマインコも，今では，鳴き声や顔つきはもちろん，１羽はやさしく１羽はちょっぴりかんしゃく持ちで臆病というふうに，まったく違った性質が見受けられるようになってきました。やさしいほうは〝ピロ〟で，いたずらなほうは〝タロウ〟と名づけました。

結婚して１年半，子どものいないわたしたちにとって，この２羽のダルマインコは実の子同様で，現在ではわが家のペースもピロとタロウに握られているかっこうです。鳥かごに入れてないので，３ＤＫの家の中をわが物顔に飛びまわり，主人もそれがかわいくてたまらないようすです。

幼いころから鳥好きの主人の夢は，すべてのインコの類を同時に飼うことなのですが，それにしてもダルマインコにこんなに傾倒してしまっては，他の鳥くんたち，はたして寄ってきてくれるでしょうか。

主人の鳥キチも，いまでは超がつくほどになっています。かくいうわたしも，１年半前では思いもよらなかった〝超！超！　鳥キチ〟にさせられてしまったのですから，人の好みなどわからぬものです。主人ともども，今から「世界動物百科」のインコ類の出る号を楽しみにして買い揃えております。■

（横浜市・小松房江・26歳・主婦）

裏表紙説明

ウソ　ハシバミの枝にとまっているのは，ウソ *Pyrrhula pyrrhula* の雄。ほおからのどにかけて，美しいバラ色をしているのは雄だけで，雌ではこの部分が灰褐色をしている。バラ色の部分が腹までひろがっている亜種は，アカウソと呼ばれるが，全身「真赤なウソ」はいない。

翼の長さは8,9センチで，スズメより少し大きい。ヨーロッパとアジア中北部に分布している。日本では北海道と，本州の山地にすんでいるが，冬になると小群で山麓や南方に移る。美しく上品な鳴き声から，コトヒキドリとも呼ばれて，よく飼育される。

この写真は早春のもの。ウソにとってもとってもしあわせな季節である。この鳥は樹木の新芽や花のつぼみ，とくにウメやサクラのふくらみかけたつぼみが，大好物なのだ。■　Ph. A. Fatras

ペット相談室



担当

高橋達志郎
（小鳥の病院院長）

〈問〉　家で７年間飼っている小鳥が，最近羽毛を立ててまん丸くふくらんでいます。真昼なのに頭を後ろにやって，目を閉じています。小鳥は病気なのでしょうか。（横浜市・小林伸子・12歳・学生）

〈答〉　小鳥は余力のない，しかも消耗率の激しい動物なので，ぐあいの悪い場合には，よほど早めに手当をしないと回復が困難になります。そこで，日ごろの観察がたいせつになってくるのです。病気の発見は，次の６項目がだいたいのめやすになるでしょう。

⑴　動作が不活発になる

ピー子！　と呼べば，すぐに返事をしていた小鳥が反応を示さず，１か所にじっとしている。また，さえずっていた鳥が，急にさえずりをやめたといったぐあい。

⑵　全身の羽毛をふくらませて眠る

小鳥は弱ってくると，体温が下がってくる。そこで，羽毛のあいだに空気を入れて，極力保温に努めるようになる。

⑶　糞に種々の変化があらわれる

糞に形がなく，水気が多い。粘液質で肛門（こうもん）にぶら下がる。粒餌がそのまま出る。緑色でゆるい。血液が混じる。白っぽく太い。以上のようなときは，すべて異常と考えてよい。

⑷　食欲不振になる

小鳥はどこかぐあいの悪いところがあると，ほとんどの鳥が，えさの食べが悪くなる。いっしょうけんめいにえさを拾いあさっているように見えても，まったく食べていない場合もあるので，夕方には必ず首のつけ根の部分（嗉嚢）を調べる必要がある。大きな動物と異なり余力がないので，24時間以上のハンストは不可能である。

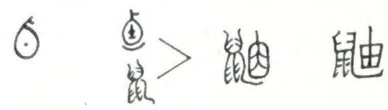
⑸　嘔吐する

首を上下に動かし，苦しそうに粒餌を吐きだす。ただの粘液だけのときもあり，血液が混じることもある。インコの雄の１羽飼いの場合に，特定の場所にえさを吐きだすときがあるが，これは求愛の動作の一種とみてよい。

⑹　糞をしない，あるいは量が少ない

食欲が減退，もしくはまったく食べなければ，糞が出ないか量が減るのが当然で，これをあわてて便秘と勘違いして浣腸するのは，かえって小鳥を弱らせてしまう結果になる。下剤を小鳥に使用することは，たいへん危険なことなので，安易に使用するべきではない。白い粘液のようなものは鳥の尿で，これが出ないのも異常とみてよい。■

漢字のふるさと　21



藤堂明保

鼬（いたち）　黄色の毛をしているので黄鼬ともいい，俗語では黄鼠狼（ホアンシュラン）と呼ぶことが多い。

私の住んでいる浦和の郊外でも，戦後まもないころにはイタチを見かけることがあった。戦地から引きあげてきた私は，食い物をいくらかでも自給しようという殊勝な決心をして，ヤギ１頭，ウサギ３匹，それにニワトリを10羽ほど飼い始めた。イタチがねらうのは，このニワトリである。なにぶんしろうとの作った鶏舎だから，あちこちにすき間がある。とりわけ，網と地面の間がもろい。そこをねらって，早朝にイタチが忍びこむ。こ奴はニワトリの生血を吸うといわれているが，肉そのものには手をつけず，なきがら（？）を放置してある。憎らしいかぎりである。

ある朝，イタチが鶏舎からサッと抜け出し，垣根をくぐって逃げるのを目撃した。そのからだは細く長く伸び，するりと狭い間隙をみごとに抜ける。中国語では，抜け去るのを「抽身走」（チョウシェンツォウ）というが，まさにそれである。

「由」とは，口の狭い油つぼを描いた象形文字で，その口から油が細く長い線をえがいて，スルスルと抜け出る。つまり，抽出されるのである。イタチは鼠を大型にした姿をしており，しかも狭い穴から，油のように「抽身」して逃げる。そこで，「鼠」+「由」で鼬と書いた。由―油―抽―鼬は，同系のことばというわけである。■

ギャラリー

土製の熊



縄文時代晩期　青森県弘前市裾野出土　高さ3.5センチ　（撮影　田枝幹宏）

これは日本最古の熊の像である。縄文時代には，土偶と呼ばれる土製の人像が，さまざまな姿で作られたが，晩期になると，猿，犬，猪，亀，熊などの像も出現してくる。粘土をこねて形を作り，裸火で焼きかためた原始的な造型だから，なかにはどういう獣なのかちょっと見当のつかないようなものもある。この熊も，体つきや顔つきから，たぶん熊に違いないと見られるのだが，ひとたび熊だと思って見直すと，まさしく熊の特色を巧みにとらえて表現していて，感嘆させられる。

もとよりこの時代の人びとは，熊の玩具を作って楽しんでいたのではなく，この像は，呪術のための偶像か，おまもりの役割を負わされた，宗教的な意味の濃い造型だったのである。掌に乗るほどの小ささでありながら，襲いかかってくるような迫力があり，姿全体から神秘的な凄みが放射されている気がする熊である。熊を神として崇めるアイヌの習俗と，何らかの関係があるとも考えられる。

狩猟生活を主にしていた時代だから，熊は恐るべき獣であると同時に，貴重な獲物でもあったろう。その熊に対する縄文時代の人びとの感情が，この小像のなかにこもっている。体に刻みこまれた深い線彫は，これはあるいはこういうみごとな熊を獲りたいと祈る念願をあらわしているのではなかろうか。■

（水尾比呂志）

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻26号 昭和46年9月5日発行 （毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



ウソ　説明 30ページ

雑誌コード [illegible]